

『住友海上火災保険株式会社百年史』

財団法人日本経営史研究所編集

住友海上火災保険株式会社発行

1995年1月 1004p 27cm 索引あり

---

本書の最大のメリットは、文字通り本格的な社史だという点に求めることができる。それは、以下の諸特徴から明らかである。

まず、きちんとした時期区分にもとづき、しっかりした編別構成がなされている。第2次世界大戦以前は経営環境の変化により、戦後は企業戦略の転換をふまえて、各章が区分されている。

次に、各章の叙述に統一性がある。経営環境、戦略と組織、事業展開、資産運用と業績という順に、安定的な記述が展開されている。

また、全体として考証が行き届いている。それを可能にしたのは、執筆者たちの分析能力の深さと一次資料の活用とであろう。

総じて分析的な叙述が展開されている中で、とくに光が当てられているのは経営戦略のあり方である。

第9章の「世界一」、第12章の「イノベーション」という用語は、章タイトルの表現としては違和感が残るが、それでも各章ごとに、経営戦略とその帰結が明快に記されていることは確かである。

さらに、資料や年表、索引が充実している。

そして最後に、特筆すべき点であるが、同業他社との競争がきちんと書き込まれている。損保業界の場合には、保険商品ごとのシェアとランキングに関するデータが入手しやすいという事情があるようであるが、それでもシェアやランキングの変動が生じた要因にまで立ち入った記述が展開されていることの意味は大きい。

一方で、本書に対して選考委員の間から、いくつかの注文がついたことも事実である。おもなものを列記すると、次のようになる。

- ① 『三井海上火災保険株式会社七十五年史』や既刊の『東京海上火災保険株式会社百年史』に比べて、資産運用に関する記述が不十分である。
- ② 他の損保の社史に対しても言えることであるが、査定についての記述が弱い。
- ③ 子会社である摂津海上が親会社である大阪海上から再保険を引き受けたことの意味（第4章）、損保事業に進出した際の住友サイドの企図（第4章～第5章）、第2次大戦後、住友系企業が株主として復活した経緯（第7章）、などがよくわからない。
- ④ バブル関連の記述が不十分である。

最後に、充実した内容の本書を通読しても、やや面白味に欠ける印象が残ったことを付け加えておこう。これは、損害保険業が強い規制のもとにおかれてきたことを考え合わせると、いたしかたのない点なのかもしれない。しかし、例えば日本社会におけるリスクのあり方の変遷をもっと前面に押し出し、火災・海難事故・交通事故などの社会史を、より積極的に記述していたとすれば、本書の面白味は増大したような気がする。

なお、今回の「優秀会社史賞」の選考過程では、本書（『住友海上火災保険株式会社百年史』）のほかにも、『三井海上火災保険株式会社七十五年史』と『日本火災海上保険株式会社百年史』が最終的な候補作品に残り、“損保社史の当たり年”ともいうべき状況が現出した。こうなると自然、3社の社史を見比べるということになるが、いずれにも一長一短があって、選考委員の間でも完全に意見の一致をみたわけではなかったが、総合的に上記のメリットを評価して、本書を「優秀会社史賞」受賞作品に選定した。

（橘川武郎）